

Y校アーカイブ vol. 3 1 「校歌の謎」

Y校の校歌は、森林太郎(森鷗外)作詞・小松耕輔作曲によるもので、大正5年(1916年)に制定されました。この校歌の歌詞について、Y校と横浜市立大学の合同の同窓会組織である「進交会」におたずねがありました。『校歌の2番の歌詞「競ひの場のますらを我等」の「競ひ」の部分には「きほひ」とふりがなが振ってある。今まで「きそい」と歌ってきたが、本来は「きほひ(きおい)」と歌うのではないか』という質問に、進交会の方がお手元の資料などで確認されたと聞き、Y校図書館で保管している資料でもわかることがないか調べました。(文中の「森鷗外」の名前の「鷗」の字の表記を、文字化けを避けるため新字の「鷗」で統一し、敬称を略しました)

＜周年誌の校歌＞

図書館に所蔵のある、校歌制定後の周年誌の校歌のページを確認しました。

その中で一番古い、昭和8(1933)年の『Y校五十周年記念誌』に、歌詞のみが掲載され、「競ひ」の文字には「きほ(ひ)」と振り仮名が振ってあります。

以後、七十年、八十年、九十年、百年、百十年、百二十年、百三十年、百四十年の周年誌を確認しましたが、楽譜があるものも無いものも含め、すべて「きほ(ひ)」となっていました。

『Y校五十周年記念誌』 昭和 8(1933)年

『Y校九十周年記念誌』 昭和 47(1972)年

校 訓

教育勅諭ノ聖旨ヲ遵奉シ大日本國民タル光榮ヲ保チ平素ノ言行舉動ニ於テ左ノ商業道徳ヲ實踐スヘシ

- 一 正直 専ラ正直ヲ確守シ決シテ人ヲ欺クヘカラサルコト
- 一 勉勵 専ラ業務ニ勉勵シ決シテ怠ルヘカラサルコト
- 一 正確 指定ノ時ニ於テ指定ノ事ヲ厳行シ決シテ時期ヲ誤リ若クハ執務ニ於テ社漏ノ所爲アルヘカラサルコト
- 一 緻密 業務ヲ處スルニ緻密ナル思想ト行爲ヲ以テシ決シテ粗略誤謬アルヘカラサルコト
- 一 整頓 業務ヲ處スルニ順序方法ヲ確定シ其確定ヲ固守シ決シテ忽ニスヘカラサルコト
- 一 精察 業務ヲ企圖スルニ深く既往現在ノ事情ヲ探究シ靜ニ將來ノ結果ヲ精察シ決シテ遺算アルヘカラサルコト
- 一 機敏 業務ヲ處スルニ敏活ニシテ機ヲ視テ勇進シ理ヲ斷行シ決シテ遲疑スヘカラサルコト
- 一 謹慎 一言一行ノ微ト雖謹嚴慎重ヲ守リ決シテ粗忽ノ事アルヘカラサルコト
- 一 耐忍 耐忍不屈ノ精神ヲ涵養シ如何ナル困難ニ遭遇スルモ決シテ切志ヲ變スヘカラサルコト
- 一 注意 一小事ト雖必ス留意注目シ決シテ等閑ニ附スヘカラサルコト

明治三十年十二月


校 歌

森 林 太 郎 作 詞
小 松 耕 輔 作 曲

一 榮 行 御 代 の 民 草 我 等
事 業 こ そ は 種 々 か は れ
か わ ら ぬ も の は 心 の 誠
誠 を 守 る 商 人 我 等

二 競 ひ の 場 の ま す ら を 我 等
命 の か ぎ り 人 に は 負 け じ
忘 れ む 家 を 惜 ま じ 身 を も
力 を 頼 む 商 人 我 等

い で や 見 ま せ 朝 な 夕 な
挽 ま す 共 に 職 ぶ 我 等



森 鷗 外 博 士


校 歌

森 林 太 郎 作 詞
小 松 耕 輔 作 曲

一 榮 行 御 代 の 民 草 我 等
事 業 こ そ は 種 々 か は れ
か わ ら ぬ も の は 心 の 誠
誠 を 守 る 商 人 我 等

二 競 ひ の 場 の ま す ら を 我 等
命 の か ぎ り 人 に は 負 け じ
忘 れ む 家 を 惜 ま じ 身 を も
力 を 頼 む 商 人 我 等

い で や 見 ま せ 朝 な 夕 な
挽 ま す 共 に 職 ぶ 我 等



＜『美澤先生』の中の校歌＞

大正12(1923)年に亡くなられたY校初代校長の美澤進先生を偲び、昭和12(1937)年に『美澤先生』という本が刊行されました。その中に、4ページにわたって校歌について書かれたページがありました。

「森鷗外博士作の校歌制定 一博士、深く先生に傾倒さる一」というタイトルがつき、大正5(1916)年4月の職員会議で「校歌を制定しては」という議が上がったこと、森鷗外のもとを美澤先生が訪れて校歌を依頼したときの様子、美澤先生が校訓と学則を前にして「商人たるものは」と森鷗外に語ったこと、3週間後に校歌を受け取りに行った武井武次郎教諭に森鷗外が語った美澤先生像、そして森鷗外から「作曲を小松耕輔氏に」と紹介があったこと、小松氏が「できあがった校歌を木版に起こして置かれては」と提案してくれたことなどが書かれています。続くページには楽譜と歌詞が掲載されています。この楽譜が文面にある芝愛宕下の彫刻師に彫ってもらった楽譜かどうかはわかりません。楽譜、歌詞のどちらも「きほ(ひ)」となっています。

『美澤先生』 昭和12(1937)年1月

二

一

Y 校 校 歌

小 森
松 林
耕 太
輔 郎
作 作
曲 詞

い で や 見 ま せ 朝 な 夕 な
 挽 ま す 共 に 戦 ふ 我 等

い で や 見 ま せ 朝 な 夕 な
 挽 ま す 共 に い そ し む 我 等

競 ひ の 場 の ま す ら を 我 等
 命 の か ぎ り 人 に は 負 け じ
 忘 れ む 家 を 惜 ま じ 身 を も
 力 を 頼 む 商 人 我 等

榮 行 く 御 代 の 民 草 我 等
 事 業 こ そ は 種 々 か は れ
 か は ら ぬ も の は 心 の 誠
 誠 を 守 る 商 人 我 等

— 209 —

森鷗外博士作の校歌制定

— 博士、深く先生に傾倒する —



森 鷗外博士

森鷗外博士作、小松耕輔氏作曲の校歌が制定されたのは、大正五年であつた。その年の四月頃、職員會議の席上で、校歌を制定しては如何との議が、一職員から提案された。先生は、廻轉椅子に、やや左方へ身體を傾けながら、至極機嫌よく聽いて居られたが、この提案を即座に採擇され、早速考へて見ませうと言はれた。先生は重ねて、作歌を誰に依頼するかに就て一同の意見を徴せられた。すると、或職員から、森林太郎博士を煩はしてはどうでせうとの提議が出た。先生は、鷗外博士にお願ひ出来れば非常に結構であると賛成された。

先生が單身上京して、博士を訪問されたのは数日後であつた。博士は先生の申出を聽かれて言下に快諾を與へられた。それから二三日の後先生は教諭武井武次郎氏を同伴し、再度博士を訪問して、作歌資料を示された。それは校訓と學校の規則とであつた。學校の教育方針は、ペンと剣であるとの先生の意圖を、其儘示顯したものは校訓であり學期であるから、その精神を酌入れて、校歌が作られるのは當然のことである。

鷗外博士邸の玄關には、向つて右の端に口徑八寸ばかりの、錆びた半鐘が釣下けられてあつた。その下には、撞木が備へ付けられて、訪問者は之を打つて、訪問の合圖をするやうになつてゐた。武井氏は直ちにカンカンと鐘を叩いた。餘り冴えた音ではなかつたが、流石に博士の邸宅らしい、一種幽玄な氣分に打たれた。博士は今しがた歸られたところであつたか、軍服姿で玄關に立つてゐられた。先生を一目見ると、やアと気軽に挨拶されて、どうぞお上り下さいと言はれた。

和服に着換へられた博士と先生とは、靜かに對坐された。一通り挨拶がすまされると、先生は早速校訓と學期を博士の前に差出された。さうして先生は、大要左の如く語られたのであつた。

「苟くも商人たるものは、昔の武士と同様であります。正直で言行一致の決心で行かねばなりません。失敗しても意氣銷沈せず、飽くまでも剛毅な氣性がなければいけません。故に私は、正直を身の寶として、常に事に當つては、不退轉の大勇猛心を持し、旭日旗の進むところ、世界の商戰場裡に起つて、各個人を向ふに廻し、商氣縦横、國家のため獻身的に奮闘し、彼等外人に一步も譲らぬ堅實なる商人を養成致

したいと存じますので、その方針の下に、此校訓を毎朝生徒に讀ませて居ります」

鷗外博士は、黙々と首肯しつつ先生の語られるを傾聴されてゐたが、やがて徐ろに口を開かれて、まことに御同感です、よく判りました、早速作りませう、と言はれた。その日先生と武井氏とは、晝食の饗應を受け、三週間の期を約して博士邸を辭したのであつた。

三週間の後、武井氏は先生の使者として、再び博士を訪れたが、尙四五日待つて貰ひたいとのことであつた。博士はその時武井氏に對し、横濱商業學校のことは豫てより存じて居る、一年志願兵を多數出されるので、學校の名前は知つて居つたが、美澤先生にお目にかつたのは、今度がはじめてである。まことに御立派な方である。Y校はよい校長を得られたものである。生徒の仕合せはどれ程であらう。あの方ならば、こちらから進んで作つて上げたいと思ふ。あなた方も、よく御面倒を見て上げて下さい、得難い方である……と申されたのであつた。流石に鷗外博士の見るところは高かつた。Y校はよき校長を得た、得難き方であると言ひ、あの方ならば、こちらから進んで作つて上げたいとまで言はれたのである。先生の飾らざる率直の辯、眞摯熱心なる態度に、博士は心から敬服されたのである。

武井氏は、五六日を経て三度博士邸を訪問した。歌詞は既に脱稿してゐたが、作曲のため學習院女子部の、小松耕輔氏の手許へ廻してあるとのことであつた。博士は小松氏への紹介狀を書かれた。武井氏は

その足で小松氏を訪問した。しかし、作曲はまだ出来上つてゐなかつた。一週間程猶豫して貰ひたいとのことであつた。

再度小松氏を訪れた時には、校歌は立派に作曲されて且つ美事に淨書されてあつた。小松氏は、甚だ不出來だが、若しお氣に召したならば本版に起して置かれる方がよろしからう、といふことで、芝罘下の彫刻師まで紹介されたのであつた。

先生も非常に満足された。早速彫刻せよとのことであつた。日ならずして、先生は武井氏を帶同、鷗外博士を訪問して、御禮の言葉を述べられ、銀行爲替とした金百圓を差出された。すると、博士は極くあつさりとして、私は作詞料は申受けませぬ、作曲に努力なされた、小松氏に贈呈いたしませうと言はれた。果して其後小松氏から先生宛金子受領の手紙が届いた。森博士の人格の高潔なことは、今更申すまでもないが、校歌作成に關して、何等の禮物をも受けられなかつた心情には、博士が、先生の人格に傾倒された證左とも察せられ、Y校のあらん限り、幾千幾萬の學生に依つて高唱される校歌の上に、美はしくも誇らしき挿話を残したものと云へやう。

<武井武次郎先生による、校歌制定依頼 森鷗外邸訪問時の様子>

『美澤先生』に登場する武井武次郎先生は、明治33(1900)年から大正14(1925)年まで、体育の教員としてY校に勤務されました。明治37、8(1904、5)年の2年間は日露戦争に従軍し、戦地から日本の美澤先生に宛てて書いた手紙が21通も残されています。

『五十周年記念誌』に寄せた武井先生の「在りし日の美澤先生」という文章の中に、「Y校校歌の昔話」という、校歌を森鷗外邸に依頼しに行く様子が書かれている章がありました。『美澤先生』に記載されていた校歌に関する記述は、この『五十周年記念誌』の武井先生の文章を参考に書かれたものと思われます。

『五十周年記念誌』 昭和8(1933)年3月

に堪へないとくわしく話された事がありました。

Y校校歌の昔話

大正五年四月の候、職員會議の席上で、吾がY校には校歌がないが、之は甚だ物足りない。どうしても校歌を作る必要があるとの職員方から提議があつた其の時校長先生は、廻轉椅子に少し休を左方に傾けながら至極御機嫌のよい様子で、これは早速考へて見ませう。然し作るすれば何人か御願ひしたものであらうかと御諮問で、或る職員は文學博士森林太郎先生は如何でせう。いや森鷗外先生に御願ひが出来ればこれは非常に結構な事であるとの事で其後四五日過ぎて先生は、では鷗外先生の所に出かけて見やうと、お獨り御上京になつた。翌日校長先生は、校歌作成の件は幸ひ御承諾を得た。明後日作歌に就ての材料を御提供する事にお約束して来たから同道してもらいたいとの事で、私がお供をする事になりました。では材料といふのは、どう云ふ物を持参致しませうかと伺ひますと、先生は學校の教育方針はペンと劍ぢやとの仰で、それでは兎に角校訓と學校規則を持参して後は話で傳へる事にしやうとの事であつた。鷗外先生の玄関口には、向つて右端に口徑八寸半りの錆びた半鐘が釣り下げられ、其の下に鐘木が置かれて訪問者は之を打つて、訪問の合圖をする様になつて居た。早速カンカンと鳴らした所が、餘り牙へ

御宅に伺ひました。然るに今作りつゝある所であるから、今四五日待つて貰ひ度いとの事であつた。其の時森閣下は私に言はれるのは、余は横濱商業學校の事は豫て聞いて居る。よく一年志願兵を出されるので、學校の御名前は知て居つたが美澤先生にお遇ひしたのは今度が初めてである。誠に御立派な方である。よい校長を持たれたものである。生徒の仕合せほど程であらう。彼の方ならこちらから進んで作つて上げたいと思ふ。貴方がたもよく御面倒を見て上げて下さい得難い方であるとお話で、それから五六日経つて更に伺ひました時は已に出来て學習院女子部の小松耕輔先生に作曲をお願いして送つてあるから、小松氏の所へ行けとの御紹介状を戴き學習院に伺ひます。小松氏は只今森先生の所からお電話で承知して居ります。今作曲中であるから一週間程お待ちを願ひ度いとの事で後一週間目に伺ひました時は、立派に淨書せられてありました。小松先生は甚だ不出来ですが、若しお氣に召しましたら之を木版に起して置く方が宜ろしからうと思ふ。彫刻をするならば、芝區愛宕下に上手な彫刻師があるから、私より御紹介致しませうとの事で御名刺を頂きました。

扱て校長先生にお目にかけると非常なるお悦びで早速彫刻せよとのお話があり、此の校歌こそ即ち、今日まで傳つて居るY校の校歌であります。當時校歌の作歌御禮として、百圓

ない昔ではあつたが、玄關に見えられたのは、御主人の森閣下で軍服姿のまゝである。ヤードどうぞお上り下さいとの事で艦がて和服に着更られた森先生と美澤先生とは御對座になり一通りの御挨拶が済みますと、早速校長先生は豫て携帶の校訓と學則を御覽に入れて、そして次の様なお話をされました。これはお話の要領である。苟くも商人たるものは昔の武士の様で、正直で言行一致の決心で行かねばならぬ、失敗しても意氣消沈のせぬ、豪氣なる氣性がなければいけぬ。故に私は正直を身の至寶として、常に一向不退轉の大なる猛心を持し帝國々旗の進む處世界の商戰場裡に起つて、世界各國人を向ふに廻はし、商氣縱橫國家の爲め献身的に奮闘し彼等外人に一步も譲らぬ堅實なる立派な商人を養成致し度いと存じますので、其の方針の基に此の校訓を毎朝生徒に讀み聞かして居ります。斯様の意味を述べられたものである。私は懼然として恐縮し、先生が今日まで卒業生の海外に出ての發展を獎勵せられたのが解り、ペンと劍とによる海外發展の御理想が判かつた様な次第でした。

鷗外先生は黙つたまゝ、うなづかれつゝ校長先生のお話を傾聴して居られたが、艦がて除るに言はれるのには、誠に御同感です。よく判かりました。早速作りませう。三週間計待つて下さいとの事で、私も光榮に浴し素食の御饗應を受けました。三週間の後、私は先生の使者として再び鷗外先生の

九六

を銀行爲替として鄭重にして、私が校長先生のお供をし御禮に森閣下の御邸に伺ひました處、閣下には私は作歌料は申受けぬ、作曲に御努力下さつた小松氏に贈呈致しませうとの事で、果して其の後小松先生より校長先生に宛て金子の受納のお手紙が届きました。森先生の御人格、當時の有様、私には昔が偲ばれてなりません。皆これ涙の種で御座居ます。

吾々は一生に亘りて長く知、 徳、體の修養鍛鍊を續けたい

前校長 森 本 泉
事務取扱

Y校諸君

予は學生時代に慶應義塾に居り親しく偉人福澤先生に接するの機会を得、時々演説館(只今三田山上に記念館として保存せらる)にて先生の演説——といふよりは寧ろ打撃けたる談話——を聴き、又時には學友と共に三田臺上に先生の御宅を訪問して修養に關する縦横談を承はり、又居合ひや米搦きの現場などを予等に開放せられてエイ／＼の勇ましき掛聲高く流汗鍛鍊、之れを日課として運動せらるゝ有様を見せて戴き、深き感銘を印したのである。爾來鳥見匆々早くも三十有餘年を過ぎ静かに往時を回想すれば全く夢の如き心地がするのである。

<『鷗外全集』の校歌>

大正11(1922)年に森鷗外没後、翌大正12(1923)年より昭和2(1927)年にかけて、『鷗外全集』が「国民図書株式会社」「春陽堂」「新潮社」の3社共同で組織された「鷗外全集刊行会」から刊行されました。全18巻の全集のうち、大正15(1926)年に発行された第6巻に「横濱商業學校校歌」がおさめられています。

この後、昭和6(1931)年にふたたび「鷗外全集刊行会」から、そして昭和13(1938)年、27(1952)年、48(1973)年には「岩波書店」から、新たな『鷗外全集』が発行され、そのすべてにY校の校歌は掲載されました。

2番の歌詞には、どの『鷗外全集』にも「きそ(ひ)」と振り仮名が振られています。

後記や注釈のページには、「きそ(ひ)」と振り仮名が振られた経緯や典拠などは見当たりませんでした。

大正 11(1922)年、昭和 6(1931)年、そして昭和 13(1938)年の『鷗外全集』では、一番の歌詞が「異(かは)らぬものは心の誠を守る商人われら」と、「誠」がひとつ足りない状態となっています。昭和 27(1952)年の『鷗外全集』では、「異(かは)らぬものは心の誠 誠を守る商人われら」と正しく直されておりました。

大正期発行の『鷗外全集』の巻末にある、与謝野寛(鉄幹)の「編纂者の言葉」に、『横濱商業学校校歌』は明治四十年の作である。是れには小松耕輔氏が作曲してある。』とありました。実際は大正 5(1916)年です。この記述は昭和 6 年版にも見られ、昭和 13 年版は後記への記述はないものの、題名の「横濱商業学校校歌」の下にかっこ書きで(明治四十年)とありました。

昭和 27 年版にはその題名の下に記述が(大正五年)と直っており、前述のように校歌の歌詞の「誠」の部分も正しいものになっています。昭和 48(1973)年版の後記には『「大正五年作」と昭和二十七年刊の岩波版全集にある。』と書かれ、昭和 27 年版を踏襲したことが見受けられます。

『鷗外全集 第6巻』 鷗外全集刊行会 大正15(1926)年7月

横濱商業学校校歌

榮ゆく御代の民草われら、
事業こそは種種興れ、
異らぬものは心の誠を守る
商人われら、
いでや見ませぬな夕な、
接まき共に歎しむわれら。

命の場のみすら男われら、
命の限り人には負けじ、
忘れん家を惜まじ身をも、
力を惜む商人われら、
いでや見ませぬな夕な、
接まき共にたたかふわれら。

545

歌詞の三行目、「誠」がひとつ足りません

編纂者の言葉

一、「横濱市歌」は明治四十二年に東京音楽学校の囀に由り、その六月に作られたものである。
二、「沙羅の木」は大正四年九月五日に阿蘭陀書房から單行本として出されたものであるが、「譯詩」と「沙羅の木」の二部に分れている。今其原本から「長宗我部信親」「オルフェウス」「我百首」の三を抜いて別に掲げ、また「沙羅の木」の詩の終りへ「燈」以下「三題」に至る七篇を加へた。是等の七篇は他の詩とは同時の作であるから、便宜上ここに収めたのである。

三、「野薔薇」は雜詩「國民之友」第七卷第九十九號(明治廿三年十一月三日發行)に出されたもので、翻譯の年代から云へば「於母影」に次ぐものである。

四、「我百首」は「スバル」第一卷第五號(明治四十二年五月一日發行)に與謝野寛、與謝野晶子と共に、各百首の短歌を掲げた時に發表されたものである。後に其れを單行本「沙羅の木」に収められた事は前に述べた通りである。

五、「常磐會談」は先生と智吉鶴所先生との主唱に由つて、毎月公府山縣有朋氏の橋田基に催した常磐會に出講された短歌である。常磐會の成立に就ては、「常磐會談」(明治四十四年四月廿日發行)初編の奥に吉田通泰先生の談話を筆記した「常磐會の沿革並に會則」が之を述べている。其初めに次の一節がある。
「明治二十九年六月十日の夜、森林太郎、智吉鶴所、氏が小出葉大日嗣、佐佐木信綱の三氏と會とを演

五月に香森縣飯柳町の安田秀次郎氏のために建船の中に書かれたものである。安田氏は與謝野寛が此の編纂者の言葉の校正を舉げらうとする日、即ち大正十五年七月十二日を以て歿した。氏は歌人にして格より先生を敬慕する人であつた。

一、此巻は大正十二年の夏に、「常盤考」全部の編字を終つて居たのであつたが、其年九月の大震災のために印刷所と共に製版を焼き、其後印刷所の回復を待つて再び編字に着手したが、發漢字の活字の不足してゐる理由で進捗せず、また一方に未定案であつた「元漢考」の完成にも時を要し、加ふるに他巻に入れる豫定の韻語が送られて此巻に収録せざるを得ぬ状態となり、俄かに豫定を變更して、此巻の初めに載せたるより、大震災後の編者等の境遇にそれとれ變化する所があつて、原稿の整理に取つたのために、此巻は勿論、第五、第十八の二巻までが、非常なる出版の滞滞を結果した。此事は特に讀者諸君の御諒を乞ふ次第である。此巻の韻語に伴つた漢詩を加へたいと思つたが、紙数の超過したために、第十八巻へ廻し、漢文と併せて収録する事にした。

一、此巻は初校再校までを森潤三郎、平野萬里二氏が之に當り、三校より五六校までを正平致夫、與謝野寛二人が當つた。猶「常盤考」だけは吉田増城先生も一回校正されたが、「元漢考」は吉田先生に校正を乞ふのを得なかつた。

一、最後に、此巻の編纂のために前述の吉田増城、芝島盛雨先生を始め、森潤三郎、小泉恒一、船越政一、小嶋政二郎、岩田準一、鈴木春浦、其他の諸氏から幾多の資料を供給された御厚意を深く感謝する。

編纂者の言葉

横濱商業學校校歌 [大正五年]

榮さかゆく御代の民草たみくさわれら、
事業しぎやうこそは種たぐひ種たぐひ異ちがれ、
異ちがらぬものは心の誠まこと、
誠まことを守る商人しやうじんわれら、
いでや見ませ朝あさな夕ゆふな、
挽ひまず共に勤こしむわれら。

競まひの場ばのますら男おとこわれら、
命いのちの限り人ひとには負まけじ、
忘われん家いへを惜おまじ身みをも、
力ちからを恃たむ商人しやうじんわれら、

いでや見ませ朝あさな夕ゆふな、
挽ひまず共にたたかふわれら。

横濱市歌 明治四十二年六月

わが日の本にっぽんは島國しまくによ朝あさ日ひ輝ひらぐ海うみに連つり峙たつ島しま々々なれば、あらゆる國くにより舟ふねこそ通とへ。

されば港みなとの數かず多おほけれど此こゝ横濱よこはまに優まさるあめやむかし思おもへば苦くる屋やの煙けむり、ちらりほらりと立てりし處ところ。

今は百ひゃく舟ふね千せん舟ふね泊とどる處ところぞ見みよや果はなく榮さかえて行いくらん御代ごだいを飾かる寶たからも入り來きる港みなと。

詩

横濱商業學校校歌

榮さかゆく御代の民草たみくさわれら、
事業しぎやうこそは種たぐひ種たぐひ異ちがれ、
異ちがらぬものは心の誠まこと、
誠まことを守る商人しやうじんわれら、
いでや見ませ朝あさな夕ゆふな、
挽ひまず共に勤こしむわれら。

競まひの場ばのますら男おとこわれら、
命いのちの限り人ひとには負まけじ、
忘われん家いへを惜おまじ身みをも、
力ちからを恃たむ商人しやうじんわれら、

いでや見ませ朝あさな夕ゆふな、
挽ひまず共にたたかふわれら。

詩

<小泉信三氏による「校歌のこと」>

小泉信三氏は慶應義塾大学の第7代塾長を務めた経済学者で、美澤進先生の親戚でありました。

『Y校八十周年記念誌』に寄せた文章の中に、校歌が『鷗外全集』に掲載されるに至った経緯として、森鷗外没後すぐに春陽堂から出版された『鷗外全集』に校歌がなかったのが、編集にあっていた与謝野鉄幹(晶子)夫妻に小泉信三氏自ら「鷗外先生の作ったこういう歌を知っているか」とY校の校歌を示した、と書かれています。春陽堂単独で発行された『鷗外全集』は見当たらず、「春陽堂」と「新潮社」と「国民図書株式会社」の三社合同で発行された「鷗外全集刊行会」による一番古い『鷗外全集』に、すでにY校の校歌は掲載されています。その巻末の、与謝野寛(鉄幹)の言葉の中に、『鷗外全集』第6巻は大正12(1923)年夏にはほとんど出来上がっていたが9月の関東大震災により印刷所が焼けてしまったため出版が延期になり、15(1926)年の7月ようやく発行できたことが記されています。そして、おわりには「最後に、此巻の編纂のために〜〜小泉信三、〜〜他の諸氏から幾多の資料を供給された御厚意を深く感謝する。」という謝辞がありました。

『八十周年記念誌』の小泉信三氏の文章は、昭和30年9月16日の美澤進先生三十三回忌法要の際に講堂にて行われた講演会で語られたもので、『鷗外全集』のくだりが実際どうであったのかわかる資料は、今のところ見つけれませんが、この巻におさめられた詩や短歌などの小さな作品のうちの最後のほうにY校の校歌があることや、謝辞に小泉信三氏の名前があることなどから、震災で出版が延期になっているあたりに編集段階の原稿を手にする機会があった小泉信三氏が与謝野夫妻に校歌の話を持ち掛けたのではないかと、などと新しい想像が膨らみました。

『Y校八十周年記念誌』 昭和37(1962)年

美沢先生を偲ぶ

小泉信三
慶應義塾大学名誉教授

私はこの学校の出身者ではありませんが、唯出身者といってもよいほどに、この学校と古い関係を持っておるものでございませぬ。

まず、美沢先生は私の親類であります。先生は私の親父と同年代でありますから、私は四十近く年が違ふのであります。けれども、先生の夫人は私の従姉であります。従って強いていえば先生は私の従兄になります。ここに美沢義雄さんがおいでになります。美沢君は従兄の子供に当りますので、彼と私は親しい友だちであります。私は少年の頃、毎夏美沢家に厄介になっておりました。この辺の地理をよく知っております。美沢先生については学校と家庭の区別はなく、先生の生活は、「学校即ち家庭」でありましたから、自然私もこのY校に入り浸っておりました。ある夏など、私は慶応の庭球部の選手をしておりまして、この学校の庭球部の選手と一緒に練習をして一夏暮したこともありました。次に、美沢先生は私の結婚の媒人でもあります。先生に結婚の

校歌のこと

この校舎は、その頃と大體において変りはない。ただ、年を経るにつれて古くなったというだけでありまして、本日ここに参りまして門の辺りから校舎の模様を見て、誠に昔懐しく思いました。昔懐しいといえ、真に懐旧の情に堪えないのは、皆さんが今お唱いになりました校歌、あれを聞いていろいろのことを思い出しました。御承知の如く、あれは森鷗外先生の作詞であります。私は、日本国中の学校の様々の校歌のうちで、言葉のあれば整った校歌は少ないのではないかと、日本の長い歴史に誇るべき文章がこ

校葬の思い出

の校歌を作った、ということは皆さんにとり非常に仕合せなことであると思ひます。鷗外先生が亡くなられて間もなく、鷗外全集が編集されました。翌後直ぐ着手されたのは、春陽堂から出した全集であります。準備が足りなかつたために、それにくらぶかの遺漏がありました。与謝野鉄幹夫妻が編集に当たっておりましたので、「鷗外先生の作ったこういう歌を知っているか」と、私が示したのはY校の校歌であります。皆さんの校歌であります。与謝野さんにはそれを知らなかつたということ、早速このY校の歌を全集に収めることになりました。これもY校と私の繋りの一つともあります。このように古い関係の深い学校へ参つて皆さんにお目にかかり、お話をすることは私にとって非常な名譽でもあり、たのしいことでもあります。

先生歿するも先生は死なす

美沢先生歿せられて三十二年。先生は歿せられても学校の命脈は益々盛に続き、みなさんのような潑刺たる男女の学生諸君にお目にかかることが出来ます。これは非常に嬉しいことでありまして「先生歿せらるるも、なお先生は死なぬ」という感じを深くする次第であります。私がここに講話に来ました頃は、男の学生ばかりでありましたが、今日はこれだけ多数の女子の学生がおられる。美沢先生の更に先生である福沢先生は、日本の婦人の地位を高めることに最も力を尽くした人の一人でありました。この福沢先生の御弟子の美沢先生の学校が、今やこれほど多数の女子学生を教育しておるといふことは、美沢先生にとりまして、また先生の先生である福沢先生にとりまして、も非常に御満足ではない

かと感ずる次第であります。美沢先生の偉大ということに就きましては、もう度々お聞きであらうと思ひます。先生が亡くなられましたのは、大正十二年関東大震災の直後であります。震災そのものによつて亡くなられたわけではありませんが、先生の死を早めたものはやはり震災である。この震災で学校が倒壊した。先生は、老齢前後の身体でありながら、学校復興のために非常な努力をせられまして、それが病をつのらせ死を早めたのであります。丁度今から三十三年前、私は鎌倉におりましたが、震災で鎌倉と横浜の交通通信が杜絶してしまつて連絡が出来ないのであります。美沢家はどうなつたか、先生はどうされたか、全く見舞も出来ないものであります。やつと汽車が通ずるようになって、見舞に参りますとそれが丁度葬式の日でありました。それは実に惨憺たるものであつて、横浜全市が潰滅したも同様でありまして、南太田の家から久保山の火葬場に運ぶ折も、辛うじて棺に納めることが出来たほどであります。葬列は美沢家から出て、学校の構内を通つて久保山へ行きまして、会葬する人で、上衣やネクタイをつけている人は一人もいない。私などもたしかシャツにズボンをつけて会葬したのであつたと思ひます。義雄君はその時ニューヨークにおりましたから、その有様を御存知でありまして、実に惨憺たるものであります。火葬場へ行きましては火葬の設備が無い。設備がすべてこわれてしまつて何もない。ただ、そこに棺を置いて、薪を持ってき

<「彰徳歌」について>

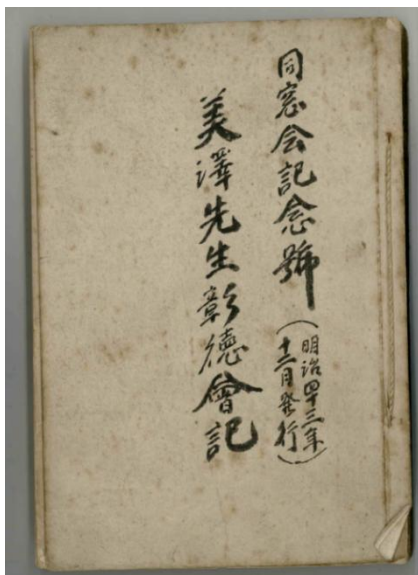
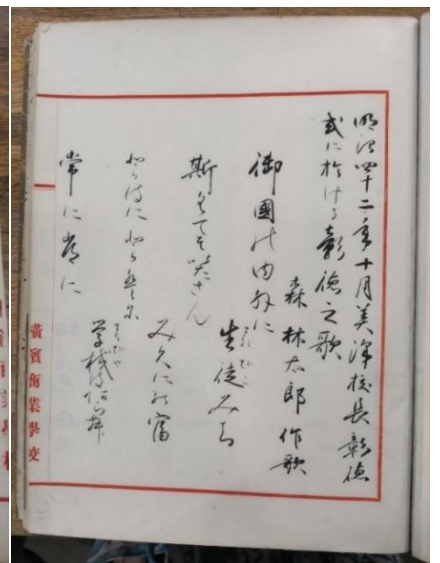
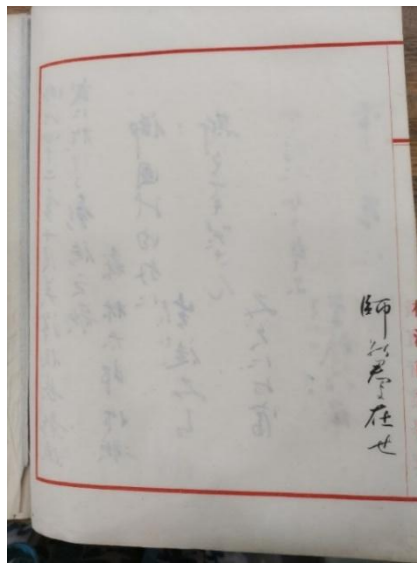
Y校の三十周年を記念して作られた『横濱商業学校誌』明治45(1912)年に、森林太郎(鷗外)が美澤先生の還暦を祝って作ったという彰徳歌が収められています。『Y校アーカイブ vol.12「横濱商業学校誌」』でも取り上げたこの三十年誌の「第五章 受賞」の項に、「明治四十二年十月美澤校長彰徳式に於ける彰徳の歌 森林太郎作歌」がありました。明治42(1909)年に作られたということは、大正5(1916)年の校歌よりもずっと前に、森鷗外によって美澤先生のために歌が作られていたということです。

「美澤先生彰徳会記」という記録の冊子に彰徳歌係として3名の名があり、続くページに「彰徳歌係は数回出京して、森鷗外先生の歌作と、東京音楽学校教授南能衛先生の作曲とを請ひ、横濱縣立女学校音楽科教授草川宣雄先生を招聘し、在校生をして、練習せしめたり。」と書かれています。どのような伝手で依頼したのかが書かれたものは見つけれませんでした。

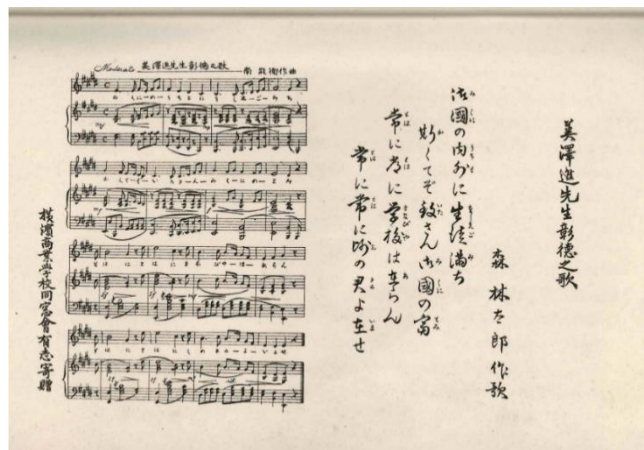
岩波書店から昭和13(1938)年、昭和27(1952)年、昭和48(1973)年に刊行された『鷗外全集』には、校歌だけでなく、「美澤校長彰徳歌」が掲載されています。大正期や昭和6年発行の「鷗外全集刊行会」から発行された『鷗外全集』にはこの彰徳歌の掲載は見られませんが、昭和13年版の後記に、「本全集に於て新に収録し得たものである」と書かれています。

筆で書かれた『横濱商業学校誌』では「生徒(まなびこ)」となっている振り仮名が、『鷗外全集』では「をしへこ」となっているなど、違いが見受けられます。

「横濱商業学校誌(三十年誌)」 明治45(1912)年

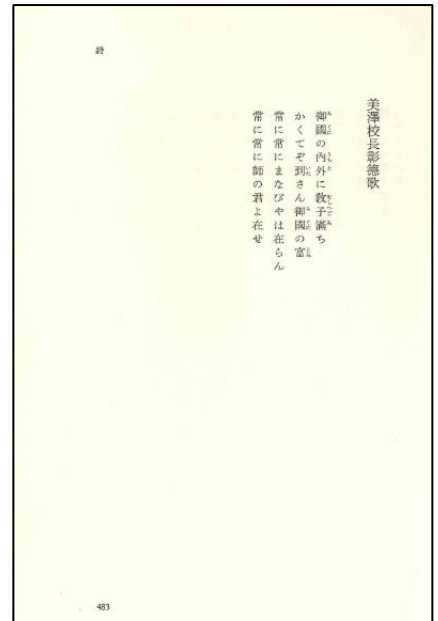
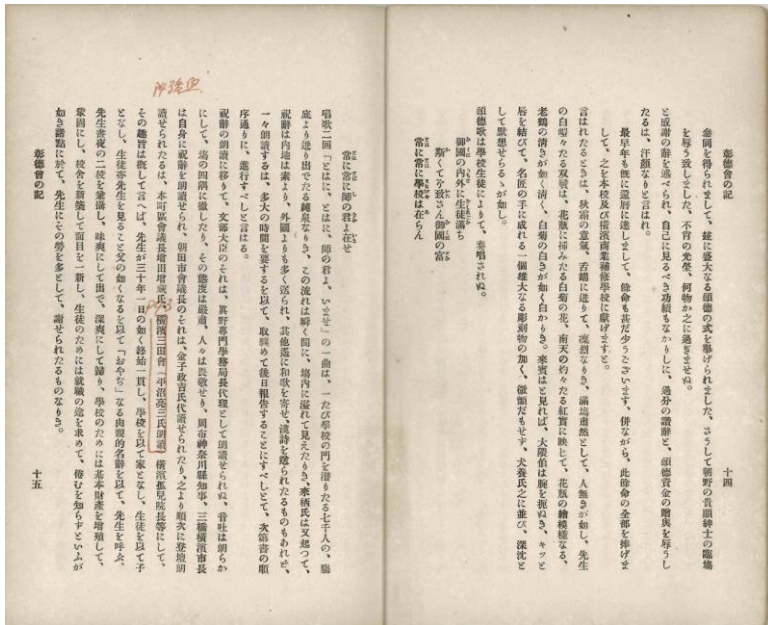


「美澤先生彰徳會記」 明治43年12月



「美澤先生彰徳会記」 明治43年9月
 (何度も改訂されている様子、こちらは9月版)

『鷗外全集』 第19巻 岩波書店
 昭和48(1973)年



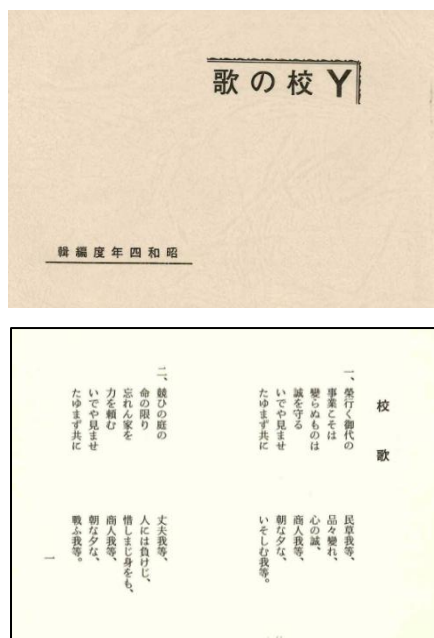
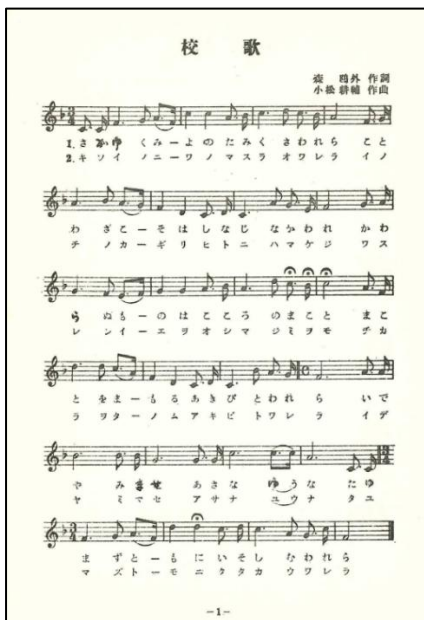
＜「応援歌集」の校歌＞

『Y校アーカイブ vol.10「応援歌」』で取り上げた応援歌集を確認しました。所蔵している3種類の応援歌集のうち、昭和4(1929)年のものには振り仮名がなく、楽譜もありません。1980年代頃の発行のものには楽譜も歌詞も掲載されており、どちらも「きほひ」となっています。楽譜は1番の歌詞はひらがな、2番はカタカナで書かれています。1965年頃の発行と思われる「校歌・応援歌」と表紙に書かれたものには、楽譜のみ掲載されています。こちら1番はひらがな、2番はカタカナで表記されており、「キソイ」となっていました。この『Y校アーカイブ vol.10「応援歌」』の中で取り上げたレコードのA面の1曲目に、校歌が入っています。ケースの裏面に書かれた歌詞には「きほ(ひ)」と振り仮名が振ってあり、歌も「きおいのにわの～」と歌っています。カラオケやYouTubeの音源も、このレコードを活用しているものがほとんどではないかと思われます。

『校歌・応援歌』1965年頃？
 こちらの応援歌集に
 「キソイ」のふりがなが見られます

『Y校の歌』(復刻版)
 昭和4(1929)年
 (復刻版制作年不明)

『横浜市立横浜商業高等学校
 校歌・応援歌』(レコード)
 昭和39(1964)年12月



＜「Y校出身の先生方」が歌う校歌＞

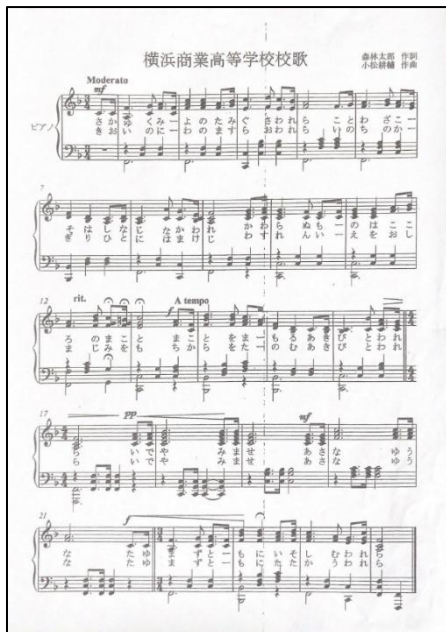
現在Y校に在籍されている、1979年から2018年に卒業された8名のY校出身の先生方に確認したところ、「きそい」と歌っていたという方がほとんどで、「きおい」と歌っていたのはY校定時出身の先生おひとりだけでした。理容・美容のY校別科では毎週の朝礼で音源を使って「きおい」と歌っているそうです。お話をうかがった先生方の中には、高校時代の記憶は定かではないので、といったことや、教員生活が長くなり何度も校歌を歌ううちに、かつてはどう歌っていたかわからなくなった、という話もありました。校歌は野球応援などでよく歌うが、1番のみのことが多いので、式典などで2番を歌う場面になると急にトーンダウンしてしまう、といった、身に覚えがあるような意見もありました。また、「競いの場の ますらを我ら」は、「お互いにライバルとして学校の中で過ごしてきた私たち」という意味だと思って歌っています」と、校歌への思いなども寄せられています。

＜辞書における「競ひ」の扱い＞

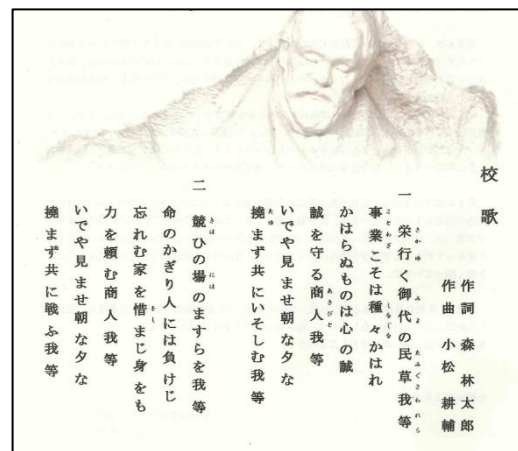
『岩波古語辞典補訂版』(岩波書店 昭和49年)によると、「競ひ」は「きそひ」「きほひ」それぞれで立項されており、「きほひ」には「勢い込んでわれ先にする意。類義語キソヒは少しでも相手にぬきんでよとする意」とありました。「きほひうま」や「きほひぐち」という言葉もあり、「きほひ」は競うよりも勢いの部分の印象が強い語として使われているようです。現代語の辞書には『広辞苑(第7版)』新村出編 岩波書店 2018年、『新選国語辞典(第八版)』金田一京助ほか編 小学館 2002年など、Y校で所蔵しているほとんどの辞書に「きおい」の語がありました。歴史的仮名遣いの「きほひ」からきた語であるという表記も、どの辞書にもありました。

＜「音楽の授業」の校歌＞

音楽の先生にお聞きしたところ、音楽の授業では、「楽譜の通り」に指導しており、「きおい」と歌っています、ということでした。この楽譜がいつから使われているものなのかは判明していません。



現在、音楽の授業で使用している楽譜
(2025年5月確認)



校歌
作詞 森林太郎
作曲 小松耕輔

一 栄行く御代の民草我等
事業こそは種々かはれ
かはらぬものは心の誠
誠を守る商人我等
いでや見ませ朝な夕な
撫まず共にいそしむ我等

二 競ひの場のますらを我等
命のかぎり人には負けじ
忘れむ家を惜まじ身をも
力を頼む商人我等
いでや見ませ朝な夕な
撫まず共に戦ふ我等

式典で配布されている校歌の歌詞

＜「きそい」か「きほひ(きおい)」か＞

『鷗外全集』と「応援歌集」、そして多くのY校生の記憶のなかにある歌詞は「きそい」でした。

当時、森鷗外から受け取った校歌に、この「競ひ」の部分にどのような振り仮名があったのかがわかる資料はありませんでした。Y校図書館で所蔵している校歌の振り仮名が掲載された一番古い資料の「Y校五十周年記念誌」昭和8(1933)年では「きほひ」となっていました。

校歌ができた大正5(1916)年ごろの「競ひ」の読み方は「きほひ」が一般的だったのかもしれませんが。

時代が進み「競い」と書かれたものを読むときに「きそい」が一般的になり、「きおい」は古語となって、漢字で書かれた歌詞を渡されて歌っていくなかで、「きそい」と歌うようになってきたのではと思われます。

Y校アーカイブ vol. 32 「学生帽」



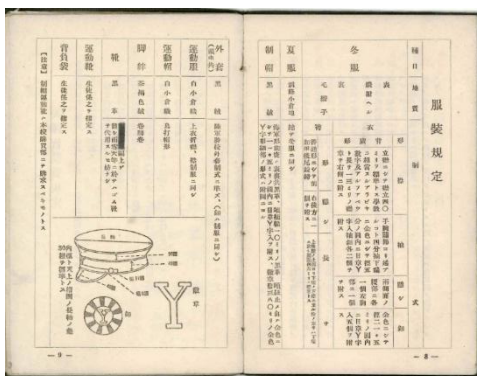
現在の制服に学生帽の規定はありませんが、以前に使われていた学生帽が残されておりました。

帽子の内側には、伊勢佐木町にあった横浜松坂屋の名前が見られます。氏名やクラスは書かれておらず、元の持ち主はわかりません。「58」とあるのは、1958年のことなのか、それとも昭和58年(1983年)でしょうか。1979年に卒業されたS先生は「学生時代にはあまりかぶってはいなかったけれど持参しなければならず、校門で学生帽チェックがあった」と懐かしんでいました。1980年代にY校に赴任されていた先生から修学旅行での写真撮影のために学生帽を持たせていたと聞き1985年の卒業アルバムを確認したところ、修学旅行のページには多くの生徒の頭に学生帽が見られました。その後いつ学生帽が廃止となったのか、今のところわかる資料がありません。

制服の制定は明治26年、学生帽も同時に制定されたようです。大正5年の卒業アルバムでは全員が着帽していますが、関東大震災後の大正14年のアルバムを見ると、学生帽ありなしだけでなく、着物の生徒もおり、おそらく震災であらゆるものが焼失してしまって帽子どころではなかった様子が見えました。

明治の開校時には横浜の港の近くにY校があったので、「横浜に上陸したら先ず“Yボーイ”をつかまえよ。大きな帽子に“Y”のバッジを付けた少年港の近くにいるから、誰でもよい、その“Yボーイ”の一人をつかまえば安心というものである。彼が横浜の道案内をしてくれるのだ(『Y校八十周年記念誌(P26)』)」と、当時のY校生の英会話力がうかがえる文章もありました。また、太平洋戦争時には「Y」の字を「横商」に変えなければいけなかったことも書かれています(『Y校七十周年記念誌(P62)』)。

昭和12年に入学した方から寄贈された生徒手帳には、学生帽について細かい記載がありました。



昭和12年卒 生徒手帳より



大正14年 卒業アルバムより



制服の襟に着ける襟章には、かつて文字が入っていました。「進商」「総合」「商経」「貿易」「文章実務」「経営経理」など入る文字は時代によって違ったようですが、図書館には「進商」と書かれたものが残されています。

2000年(平成12年)頃には文字の入った襟章は使用されなくなったようですが、いつから使われていたのかと古い卒業アルバムをたどってみました。大正5年(1916年)や昭和7年(1932年)の襟元に「Y」のような襟章が見受けられたのですが、これはどうやら学年を表すローマ数字の「V(5)」だったようです。大正15年(1926年)のアルバムには「VI(6)」が出てきました。Y校の修業年限は大正初期のころは5カ年でしたが、大正9年(1920年)より本科5カ年のあとに予科2カ年が作られました。現在の横浜市立大学の前身である横浜商業専門学校への昇格のための予科の設置のようですが、その過渡期の昭和10年(1921年)頃の入学者に、本科5年+予科1年という募集があったので、「VI(6年生)」の襟章を着けた大正15年のアルバムが存在しているようです。

太平洋戦争の最中のアルバムは保存されておりませんが、昭和23年(1948年)のアルバムに、現在の横長の「Y」を見つけました。この年に、学制改革にともなって校名がそれまでの「横浜市立横浜商業学校」から現在の「横浜市立横浜商業高等学校」となりました。この新制度で「商業科」「貿易科」に加え「普通科」が併設され、翌年の昭和24年(1949年)には横浜市立港高等学校と統合して男女共学となり、新たに「家庭科」が加わりました。昭和23年のアルバムにあるのは部活動を示すバッジのようですが、このデザインが元となり、襟章となったのではと思われます。写真が小さくて実際にどのような襟章をつけているのかははっきりしませんが、昭和31年(1956年)のアルバムの表紙には、襟章と同じ横長の「Y」がデザインされています。

大正5年
「V」の襟章

大正15年
「VI」の襟章

昭和7年
「V」の襟章

1956年のアルバムの表紙に
横長の「Y」が見られます



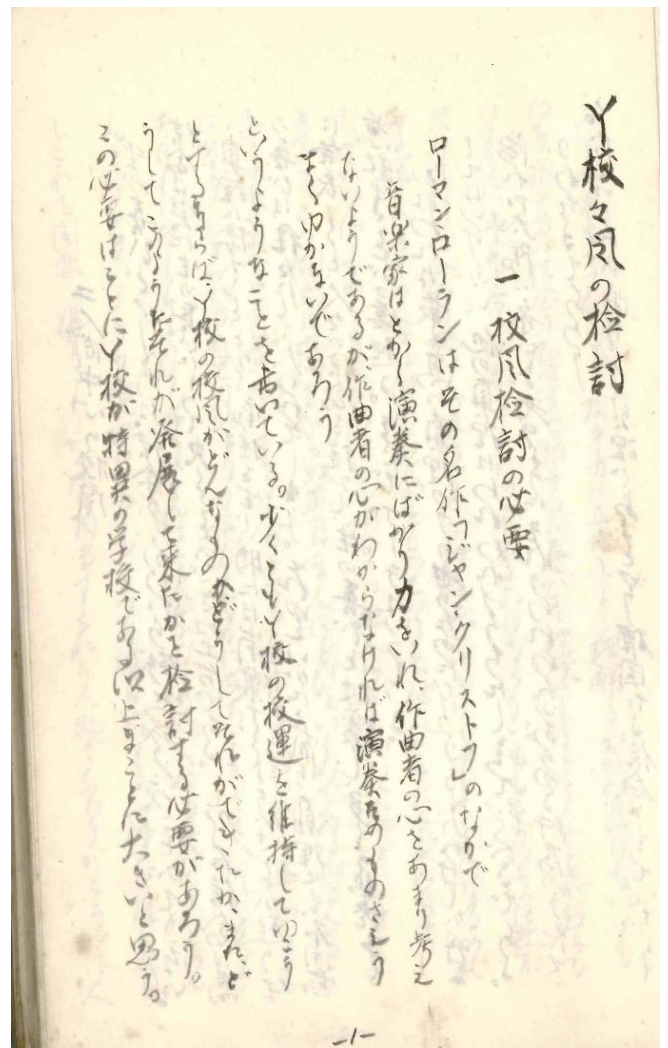
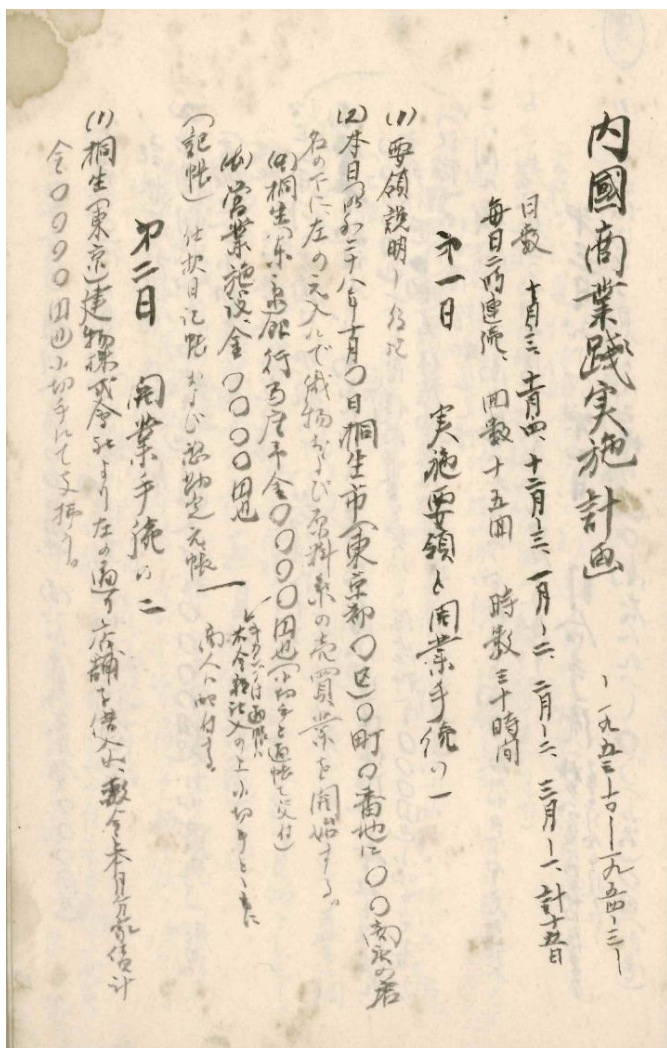
昭和23年(1948年)のアルバムの部活動のページに横長の「Y」のデザインのバッジがありました



昭和28年3月から昭和33年2月にかけて書かれた「Y校々風の検討」は、昭和11年頃までY校職員として勤務していた石原真之助氏が執筆したものです。B4を半分に折ったB5くらいの大きさの、108枚の薄い紙が紐で綴じられています。

筆で書かれた文章は、美澤先生の教えの言葉や聖書の言葉、釈迦の話、ゲーテやロマン・ロラン、ルソー等の言葉が、抒情的ともいえる文体をもって、商業教育について、そしてY校のあるべき姿について、記されています。前半では、校風検討の必要、人間中心の校風、建校の精神、環境に順応する教育の進展などについて書かれ、美澤先生は「場所と時代にあった教育をせねばなりません」と、全国の商業学校の先生がY校を訪れたときによく話されていたとありました。続く「商業実践教室の構成と実施の時期および時間」では、Y校における商業実践について、授業成功の要因、混乱の原因、指導者の数、特別教室や施設に関する事などいくつかの項目を立てて、商業の実践教育が何たるかを熱く語っています。銀行や運送店の方が指導者として実際に教育を行っている様子や、仕事を書類化して合理的にしていこうなど、具体的な記述が興味深い資料です。

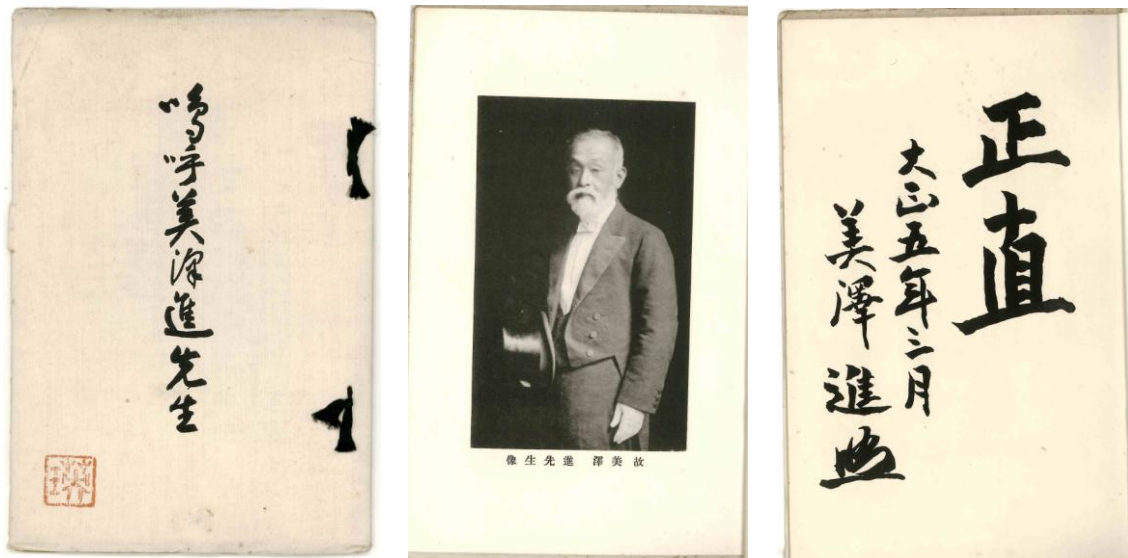
「周年誌」や「清水が丘」などへ掲載するための原稿と思われるのですが、現在のところ活字となったものは見つかりません。



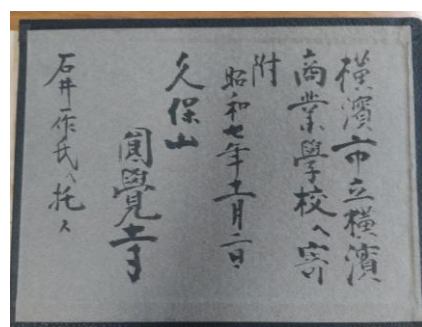
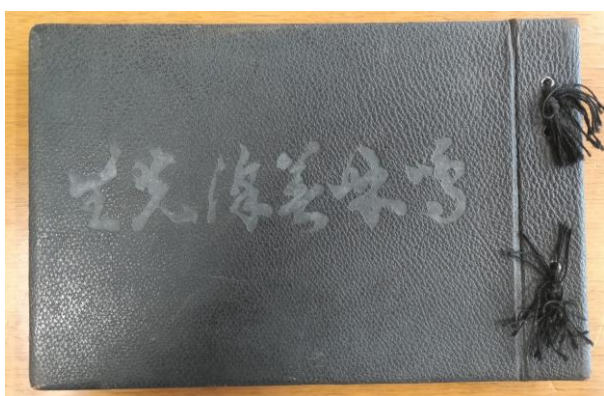
Y校アーカイブ vol. 36 「美澤先生」

美澤進先生は、Y校が創立された明治15年から、亡くられる大正12年9月までの約42年間にわたり、校長としてY校に尽くされました。

大正13年9月発行の『嗚呼美澤先生』は13cm×19cmの薄く小さなものです。美澤先生の写真と先生の筆による「正直」の文字、そして校歌の楽譜が挟まれ、先生の略歴や幼少期から亡くられるまでを24ページにわたって記した紙が綴られています。



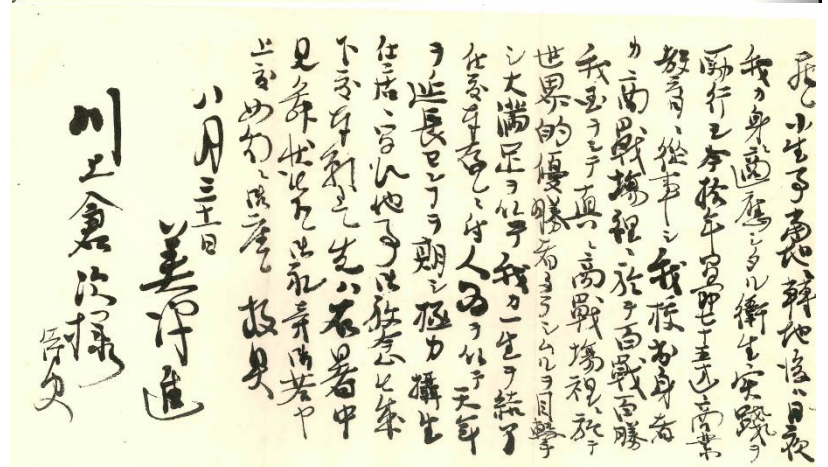
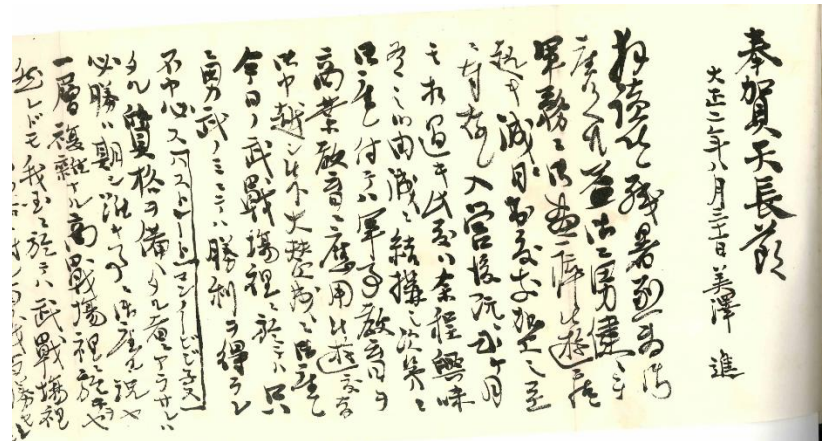
大正14年2月発行の『嗚呼美澤先生』は、美澤先生が眠る墓地のある久保山の円覚寺より、昭和7年に寄贈されました。縦18cm、横28cmの重厚な表紙をめくると、美澤先生の大規模な葬儀や納骨の儀の様子が写された45枚の写真が収められています。葬儀に参列した犬養毅元首相の姿なども見られます。



昭和12年1月に発行された『美澤先生』は全602ページで、上部の天といわれる部分には金が施されています。中には大正2年に教え子に向けて書かれた巻物のような手紙がありました。



長い手紙は中略いたしました。



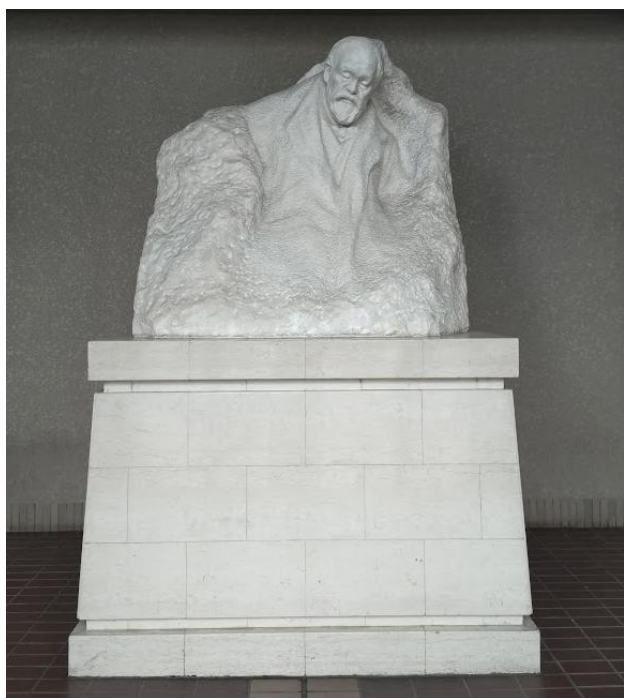
講堂の像は、卒業生の宮田喜代三さんの手によるものです。

大正3年の第26期卒業生で、昭和3年5月16日という日付がありました。

校長室にも上半身の像がありますが、こちらの制作者や作られた日にちなどは不明です。



校長室の美澤先生像



講堂の美澤先生像